

日韓翻訳にみる異文化理解のストラテジー

－栗原貞子の『黒い卵』の韓国語訳をめぐって－

李英和
kami-ai@hanmail.net

＜目次＞

- | | |
|--|----------------|
| 1. はじめに | 4.1 目次と元号 |
| 2. 栗原貞子と『黒い卵』について | 4.2 「戦争とは何か」 |
| 3. 日韓翻訳におけるForeignizationとDomestication
のストラテジー | 4.3 「狐の木の葉の小判」 |
| 4. 日韓翻訳の具体例 | 5. 終わりに |

主題語: 栗原貞子(SADAKO KURIHARA)、黒い卵(Black egg)、翻訳(Translation)、異国化ストラテジー(Foreignization strategies)、自国化ストラテジー(Domestication strategies)

1. はじめに

翻訳という行為は単に起点言語(Source Language)を目標言語(Target Language)に置き換えることだけではなく、言語外的な要因も大きく関与する。言語は文化と密接に関連しているので、翻訳行為において翻訳者は異質な両文化や習慣などを理解し、その差異を埋める工夫をして起点テキスト(Source Text、以下STと略記)を目標テキスト(Target Text、以下TTと略記)に翻訳する。そうすることによって翻訳は異文化間のコミュニケーションとして機能するだろう。

ところで、翻訳者はSTをなるべくそのまま再現しようという意識に基づいて翻訳を行うべきだろうか。それとも、他のルールや基準に従って翻訳を行うべきだろうか。もちろん、文学、言語学、文化人類学、コミュニケーション学など、様々な分野の個々のテキストによってそれぞれ異なる方法を用いる。ところが、何をどのように伝えるかということは、翻訳者の意図によって決定されることが多い。しかし何より大事なのは、それぞれの

* 城西国際大学大学院 人文科学研究科・語学教育研究センター 助教

テキストにおいて求められる機能を果たすかどうかであろう。様々なジャンルの翻訳の中でも文学作品の場合は、翻訳者が作品の解釈に多く介入することになる。その中でも特に詩はよりきりつめられた表現形態であるため、その言葉に内在する意味を深く理解したつもりでも、歴史的また文化的背景から醸し出される詩的想像力など、訳しきれないところがある。それゆえ、他の文学作品より詩の翻訳は失われるものがもっと多いだろう。

そこで本稿では、日本の詩の韓国語訳におけるストラテジーがどのように機能するか、実例をあげながら考察する。具体的には、栗原貞子の反戦・原爆詩歌集『黒い卵』(人文書院、1983年)を取り上げてForeignizationストラテジーとDomesticationストラテジーに注目する。なお、『黒い卵』の韓国語訳されたものはまだ出版されておらず、筆者の韓国語訳の実践に基づき、考察する試みである。

2. 栗原貞子と『黒い卵』について

栗原貞子(1913年~2005年)は、広島県広島市の郊外の農家に生まれた。可部高等女学校の時から短歌を書き、『中国新聞』文芸面で短歌革新の新進歌人としてデビューした。女学校を卒業したところから、短歌や詩などを雑誌や新聞に投稿していた。彼女の人生の最も大きな転機は、夫になる栗原唯一(1906-80年)と出会いであった。彼女はアナキストの唯一の思想に共鳴し、1931年に両親の反対を押し切って唯一と結婚した。栗原は戦争中から戦争批判や反軍国主の作品を書いており、戦後は夫栗原唯一と「中国文化連盟」を立ち上げて、ただちに文学運動を開始し、反戦・反核・反原発の詩を書き続けてきた。また、創作活動を行う傍ら、反戦・反核・反原発運動に積極的に参加して、一貫して反戦・反核・反原発を訴えてきた。さらに栗原は、自らも被爆¹⁾しながら、アジア太平洋戦争において日本の加害の歴史に目を向けたたぐい稀な詩人でもある。若い頃から夫の影響を受けて、アナキズムを理想としつつ作品活動や社会活動をしてきたと考えられる。

『黒い卵』の出版に至るまでの経緯をたどってみると、栗原は戦争中に書いた作品を戦後いち早く『黒い卵』にまとめて出版しようとした。しかし、GHQのプレスコードによる検閲²⁾で削除されたり、自主規制したりして1946年8月にやっと自費出版することができ

1) 栗原は32歳の時、広島で爆心から4kmに地点にあった自宅で被爆している。

2) GHQによる事前検閲は1945年9月から始まり、新聞や雑誌からこれから出版される本や論文の原稿、私信に至るまでを徹底的に検閲し、プレスコードにかかる記述を削除させていた。1952年4月28日、

た3)。検閲ですべて削除されていたのは、「戦争に寄せる」「戦争とは何か」「握手」の3篇と、短歌「巴里陥落、ヒットラー」で、さらに、栗原が事後検閲を恐れて自己規制で削除したのは、「原子爆弾投下の日」の終り5首と「降伏」の4首であった。1975年、アメリカのメリーランド大学のプランゲ文庫に保管されている検閲の資料の中から『黒い卵』のゲラが発見された。これを機に、初版が出版されてから37年たった1983年に、削除され、または自主削除した箇所を復元した完全版『黒い卵』(人文書院)が出版された。「占領下検閲と反戦・原爆詩歌集」という副タイトルがついている完全版には前半の「詩篇」29篇と、後半の「短歌編」37篇が収められている。戦争中書かれている作品が多いが、原爆がもたらした悲惨さをうたった「生ましめんかな」や「再建」をはじめ、短歌「原子爆弾投下の日」や「悪夢」など、幾篇かの原爆詩も載せられている。その他、新しく出版できるまでの経緯や削除された箇所など、それにまつわる記述などが詩歌集全体の3分の1を占めている。

日本国内の栗原貞子の作品に関する研究はそれほど多くない。しかし、反戦・反核・平和を訴え続けた詩人・運動家としての栗原の平和思想に関する研究もされている4)。韓国における栗原貞子の作品の紹介や研究活動は、筆者の知る限りではほとんど行われていない。筆者の論文「栗原貞子の原爆文学の現代的意義」5)と、講演の内容を文章にまとめた水島裕雅の「戦争と文学—文学的抵抗の問題を中心に」6)と、筆者が翻訳した詩集『ヒロシマというとき』7)が出版されている。

3. 日韓翻訳におけるForeignizationとDomesticationストラテジー

翻訳ストラテジーを論じるに当たり、まず「Foreignization(異質化・異国化)」と

サンフランシスコ講和条約発効により失効。

3) 栗原貞子(1946)『黒い卵』中国文化叢書

4) 松本 滋恵「生ましめんかな」論 —栗原貞子の原点としての「原爆創生記」を視野に入れて(『広島女学院大学大学院言語文化論叢(20)』広島女学院大学大学院文化論叢、2017年)、神野正喜「平和教材の学習指導:栗原貞子「生ましめんかな」の授業から」(『幼児教育心理学科研究紀要(3)』広島女学院大学人間生活学部、2017年)、堀場清子「栗原貞子詩歌集『黒い卵』再考」(『文学16(4)』岩波書店、2015年)、川口隆行「“あやまちは繰り返しません”と/誓ったわたしたち:交霊する栗原貞子」(『日本文学56(11)』日本文学協会、2007年)などがある。

5) 李英和(2018)「栗原貞子の原爆文学の現代的意義」『日本近代学研究第59』韓国日本近代学会

6) 広島大学の名誉教授。2008年、韓国日本近代文学会で行われた講演の内容は、『日本近現代文学と戦争』(ジェイエンシ、2016年)中に収められている。

7) 栗原貞子 著、李英和 訳(2016)『히로시마라고 말할 때(ヒロシマというとき)』지식을 만드는 지식

「Domestication(受容化・自国化)」について概観してみる。ForeignizationとDomesticationという、この二つの対立する概念は、Schleiermacher⁸⁾が提示した翻訳の技法ないし方略であるが、後にLawrence Venuti(1953~)が発展させたものである。

Schleiermacherは、テキスト・タイプを二つに分けて、商業テキストを翻訳する者と、学問・芸術系のテキストに携わる者を区別している。その上、異なる二つの翻訳の方法について「作者をできるだけそっとしておいて読者を作者に近づけるか、あるいは、作者を読者に近づけるか、のいずれかである」⁹⁾、と言う。つまり、前者は起点文化の異文化的特質を翻訳の中にも保持するためのForeignizationストラテジーであり、後者は、原文の異文化的特質を目標文化に即した形に馴化させようとするDomesticationストラテジーのことである。この二つの中でSchleiermacherが好んだ方略は、読者を作家に近づける方法、いわば「異化作用」という翻訳手法をとって異なるものへの価値付与を行い、それを目標言語に移し換えることであった¹⁰⁾。この相反する二つの概念は、近年、Venutiの論考によってもっと頻繁に論じられている¹¹⁾。彼は、この二つの概念を用いて、翻訳者の「不可視性(invisiility)」という概念を提示する。彼の論考によると、起点テキストの異質性は尊重されず、翻訳が原著であるかのように滑らかに読めると、目標文化に馴染みやすいテキストが生み出されるので、翻訳者の存在が意識されにくくなるという。

特に、英語は世界的に特権的な地位を得ている言語であるために、アングロ・アメリカの文学界においては、「わかりやすく」「流暢な言葉」で翻訳する、いわば domesticationストラテジーが翻訳の規範となっていると、それを批判する。その代わり、起点言語の社会・文化的要素を取り入れて、翻訳者が透明とならないようにForeignizationストラテジーを取るべきだと主張する。このようなVenutiの論考は、米国の状況から論じているわけだが、この二つの対立する概念は英語に限らず、他の言語間でも起こり得ると考える。

さて、この二つのストラテジーに関する先行研究をいくつか紹介すると、佐藤美希¹²⁾は英文学作品の日本語訳を例に挙げて、それぞれの機能について論じている。Foreignizationを示す翻訳例として、Oscar Wildeの風習喜劇*The Importance of Being Earnest*の日本語訳『ま

8) Friedrich Daniel Ernst Schleiermacher(1768年-1834年)は、ドイツの神学者・哲学者・文献学者

9) Jeremy Munday(鳥飼玖美子監訳)(2009)『翻訳学入門』みすず書房、pp.4-44、再引用

10) 上掲書、p.44

11) Venuti, *The Translator's Invisibility*(1995)、*The Scandals of Translation*(1998)、*Translation Community, Utopia'in Venuti (ed.) Translation Studies Reader*(2000)など。

12) 佐藤美希(2004)「日本語翻訳における foreignization と domestication のストラテジー —オスカー・ワイルドの作品翻訳をめぐる」『国際広報メディアジャーナル』第2号、北海道大学大学院国際広報メディア研究科

じめが肝心』(西村孝次訳)を取り上げ、この作品が日本で積極的に受容されなかった理由としてForeignization ストラテジーを挙げる。具体的には、「原文そのままを保持しようとするが故に、この作品の喜劇としてのおもしろさや完成度の高さを日本人読者に伝えることが出来ない」¹³⁾という。もう一方、*Salome*の日本語訳『サロメ』(日夏耿之介訳)は、原文を理解するだけでなく、その本質を日本人が共感できる形で示すdomesticationストラテジーを採っているため、英国よりもむしろ日本において好意的に受容された¹⁴⁾と言っている。また、英語や中国語に翻訳された日本語の文芸作品をポライトネスという語用論的な観点から考察した梁偉鴻は、Foreignizationストラテジーによってなるべく起点言語の対人コミュニケーションを目標言語に反映することを勧めている¹⁵⁾。

それでは、日韓翻訳の場合はどうなのだろうか。『黒い卵』の日韓翻訳において、ForeignizationやDomesticationのストラテジーがどのように機能するのか見てみよう。

4. 日韓翻訳の具体例

ある文章や作品を読む際に、言葉そのものに含まれている意味内容をどう読み取るかは人それぞれ違いうだろう。翻訳作品の場合、翻訳者が作品をどう読み取って、どう訳すかによって、STが意図している意味内容がTT読者にうまく伝わるかどうかが決められる。いわば、TT読者は翻訳されたテキストに依存せざるを得ない。それゆえ、翻訳者はSTを明確に理解し、翻訳行為を通してTTの読者に伝達することが肝心である。日韓翻訳において日本と韓国の言語・文化の差異をどのように仲介し、韓国の読者に伝達すればよいのか、この章では具体例を取り上げて論じることとする。

4.1 目次と元号

語彙を中心とする翻訳は、直接及び間接的な訳出や説明を加える訳出、さらに外来語での訳出など、様々なストラテジーを駆使することができる。『黒い卵』の韓国語訳におい

13) 上掲書、p.191

14) 上掲書、p.197

15) 梁偉鴻(2011)「翻訳におけるポライトネスと異質化翻訳ストラテジー ―日英・日中の翻訳をめぐる」創価大学大学院紀要(33)、p.253

て、STとTTの意味を比較しながらなぜこのような訳語を選択したのか、訳出の実例を取り上げて検討する。

本稿では、起点言語(Source Language)をSL、目標言語(Target Language)をTL、起点テキスト(Source Text)をSTと、目標テキスト(Target Text)をTTと表記する。

<表1>

(ST1)	(TT1)
目次	목 차
まえがき	머리말
黒い卵(完全版)	
序(細田民樹)	추천인 서문(호소다 다미키)
はしがき(栗原貞子)	시작하는 말(구리하라 사다코)
詩篇	
短歌編	
『黒い卵』と私の戦争・原爆・敗戦体験	
—解説にかえて	
資料1 CCD新聞雑誌検閲手続きについて	
資料2 プレス・コード	
あとがき	후기, 맺음말

先述したように、『黒い卵』には、詩と短歌以外にも、「まえがき」をはじめ、出版にいたるまでの経緯などの記述が詩歌集全体の3分の1を占めている。というのは、『黒い卵』は詩歌集でありながら、詩や短歌の占める割合よりも、散文で書かれたところが多いので、本稿ではいずれも分析する。

まず、『黒い卵』の目次をみると、上記の<表1>の(ST1)の通りになっている。その中で、「まえがき」や「序」、そして「はしがき」という言葉に注目したい。これらの三つの言葉は、ニュアンスは異なるものの、ほとんど同じ意味合いを持つ類義語である。これらの言葉の辞書的な意味を調べると、「まえがき」とは、「本文の前に書き添えること。また、その文章。緒言」となっている¹⁶⁾。また、「序」とは、「順。前後の順を定める。書物のはしがき。物事のはじめ。」となっている¹⁷⁾。さらに、「はしがき」とは、「書物・文章の序文。手紙の追伸。和歌などの前に書き添える文」となっている¹⁸⁾。いずれにしても、これら

16) 松村 明編(1990)『大辞林』三省堂、p.2262

17) 上掲書、p.1163

18) 上掲書、p.1937

の言葉には、「書物のはじめに述作の趣旨、成立の由来などを記した文章」という意味が含まれている。それで韓国語の訳出においても、語形は違うけれど同じ意味をもつ言葉を探してそれぞれ当てはまる言葉に訳出しなければならない。

しかし、日本語であれ、韓国語であれ、これらの言葉はいずれも同じ意味を持つので、目次の順番から考えると、各々の言葉をどのように配置すればよいのか、という問題が浮上した。実際、STの「まえがき」では、『黒い卵』の完全版が刊行されるまでの経緯や出版の意味について記述している。一方、「序(細田民樹)」には、細田民樹¹⁹⁾が栗原と初めて会った日を振り返って、そのときの第一印象や『黒い卵』を読んだ印象などを書いている。

さらに、「はしがき(栗原貞子)」には、作者の考えや思想、またそれぞれの詩についての思いと、「序」を書いてくれた細田民樹に対する感謝の言葉などがまとめられている。そう考えると、「まえがき」は、本に関する情報が大体分かるので「머리말」と訳出した。ところが、「序(細田民樹)」の場合は、「序」を直訳すると「서문(序文)」になり、「머리말」と殆ど同じ意味を持つ言葉になる。そこで、細田民樹が推薦の意を込めて書いた文章であることから、「推薦の序」という意味の言葉を付け加えて「추천인 서문」と訳し、さらに細田民樹の名前を括弧で括って「추천인 서문(호소다 다미키)」と訳出した。もう一方の、「はしがき(栗原貞子)」は、本題に入る前に出版の趣旨などを書き記した文章なので「始まりの言葉」を意味する「시작하는 말(구리하라 사다코)」と訳出し、STの同じ意味合いを持つ三つの言葉をTTのそれぞれ違う言葉を用いて訳出した。

次は西暦の年に対応する日本独特の和暦の元号を翻訳する際に、どうすれば良いかを見よう。日本では西暦とは別に年代に付けられる日本独特の和暦が使われている。元号とは、日本の特定の年代に付けられる称号で、天皇が退位し皇位継承が発生する際に新しい元号となる。いわば、日本独自の紀年法である。

韓国の場合は、1948年に建国神話に基づいた「檀紀」使用に法的根拠を与え、公式な場で使用を開始した。しかし1961年に年号廃止の法令を制定、1962年からは公式な場での使用が禁止されて以来、現在は使われず、西暦が用いられている。『黒い卵』には、年数を表すのにそれぞれ異なった書き方が見受けられる。それでは、いくつかその例を挙げてみたい。

19) 細田民樹(1892年-1972年)プロレタリア文学作家。軍隊生活を素材にした『或兵卒の記録』(1924年)など数多くの小説を発表。栗原貞子と夫の唯一が呼びかけで「中国文化連盟」を結成し、顧問になった。

(ST2)

本書は、一九四〇年から四五年にかけて、太平洋戦争前から敗戦初期にわたる時期に私がつくった詩と短歌をあつめた詩歌集『黒い卵』の完全版です。(3頁)

(TT2)

이 책은 1940년부터 45년에 걸쳐, 태평양 전쟁 이전부터 패전 초기에 걸친 시기에 쓴 시와 단가를 모은 시가집 『검은 알(黒い卵)』의 완전판입니다.

(ST3)

昭和二十年十二月(11頁)

昭和二十一年三月十八日(13頁)

(TT3)

1945년12월

1946년 3월18일

(ST4)

「戦争とは何か」(一七、一〇)

「すべての戦線から」(一八、八、一〇)

(TT4)

「전쟁이란 무엇인가」(1942년10월)

「모든 전선에서」(1943년10월)

(ST5)

一九三五年、次女純子誕生。その夜街頭では漢口陥落を祝う提灯行列がつづいた。

(「純子生まれぬ」88頁)

一九四四年一月、実家の弟が島根県浜田の連隊に入営した。中支出征直前、実家の父と夫と一緒に見送りに行った。」

(「新兵の弟」90頁)

(TT5)

1935년, 차녀 준코 출생. 그날 밤 거리에는 한커우 함락을 축하하는 제등행렬이 이어졌다.

(「준코 출생」)

1944년 1월, 친정 남동생이 시마네현 하마다 연대에 입대했다. 중지나 지역으로 출정하기 직전, 친정아버지와 남편과 같이 전송하러 갔다.

(「신병 남동생」)

(ST6)

満州事変は私が旧制女学校²⁰⁾を卒業した翌年の一九三一年(昭和六年)九月に始まった。(113頁)

(TT6)

만주사변은 내가 여학교를 졸업한 다음 해인 1931년(쇼와6년)9월에 시작되었다.

上記の(ST2)は、『黒い卵』の中で一番最初に出てくる「まえがき」の文章であるが、下線部は西暦で書かれている。(ST3)の は、推薦人の細田民樹が書いた「序」の日付であり、 は著者の栗原が書いた「はしがき」の日付であるが、いずれも元号が書かれている。また、(ST4)の下線部の と は、それぞれの作品の最後に書かれている日付であるが、元号は書いていない。(ST5)の「純子生まれぬ」と「新兵の弟」は、短歌である。日付はなく、その代わりに作品の最後に一行空けて米印()が付けられ、(ST5) のような補足的な説明が書かれている。さらに、(ST6)は、この詩歌集の解説にあたる文章の一部分であるが、下線部は西暦と元号を混ぜにした書き方である。

以上のことから分かるように、『黒い卵』の日付の書き方は、西暦や元号で書かれているところ、西暦で年代を指定し、元号を添える場合、さらに元号を省略し、年月日だけが書かれているところなどさまざまである。とはいうものの、短歌の場合は日付がないものが多い。

ところで、日本の元号を翻訳する際にはどうすればよいだろうか。一般的には西暦に表示し直さなければならない。ところが、上記のように統一されていない様々な書き方の場合は、どう対処すればよいだろうか。

本稿では、TT読者にわかりやすくするために、西暦と元号を混ぜて書かれている(ST6)を除いてすべて西暦に直して翻訳した。というのは、(ST6)の場合は、国によって独自の表現方法がある場合、必ずしも西暦に統一するのではなく、その国に合った表現に翻訳した方がTT読者にとってわかりやすい。しかしながら、何よりも大切なことは、元号・西暦・元号と西暦の混ぜなど、いくつか使い分けした作者の意図はどこにあるのか、ということについてのことだろう。『黒い卵』の中で、元号と西暦の混ぜ書きは、主に解説のところで見られる。西暦と日本の元号の違いは翻訳するときだけではなく、実際、現実の不都合と感じられる場合も多い。このことから考えると、栗原は自分が生きた昭和時代に何が起きて、何を経験していたのかを記録に残し、その記憶を多くの人と共有したいという思いか

20) 第二次世界大戦以前の日本において、中等教育から高等教育を施すための女子教育機関。中等教育から高等教育を施す高等科なども設置された。

ら元号と西暦を混ぜて書いたのではないかと推測できる。その思いとは言うまでもなく、二度と戦争を起こしてはいけないということだろう。それゆえ、本稿では、和暦(元号)の翻訳には、ForeignizationとDomesticationのストラテジー、この二つのストラテジーを用いて異なる書き方にそれぞれ対応した。

4.2 「戦争とは何か」

慣用表現とは、として長い間広く使われてきた、ひとまとまりので、二語以上のが固く結びつき、異なった意味を持つようになった定型句である。しかし、慣用句は、異文化から生じる様々な問題が存在しているので、STの慣用句がTTの慣用句の意味と似ているものもあれば、部分的あるいは完全に違う意味をもつ慣用句もあるので STの慣用句の意味を的確に理解し、文脈に合った訳語を選ばなければならない。では、二篇の詩を取り上げて慣用表現の具体例を見てみよう。詩行を「/」で表した。

(ST7)

わたしは戦争の残虐を承認しない/わたしはどんなに美しく装われた戦争からも/みにくい悪鬼の意図を見い出す。/そして自分達だけは戦争の埒外にあって/しきりに戦争を讃美し、煽る腹黒い人々をにくむ。/聖戦といい正義の戦いというところで/行われているのは何か、/殺人。放火。強姦。強盗。/逃げおくれた女達は敵兵の前に/スカートを除いて 手を合わせるというではないか。/高粱が秋風にザワザワと鳴っている高粱畑では/女に渴いた兵士達が女達を追い込んで/ 百鬼夜行の様を演じるのだ。/故国にあれば、よい父、よい兄、よい子が/戦場という地獄の世界では/人間性を失ってしまつて/猛獣のように荒れ狂うのだ。

「戦争とは何か」(p.27、1942.10)

(TT7)

나는 전쟁의 잔학한 행위를 인정하지 않는다/전쟁을 아무리 미화해도/악귀의 흉악한 의도를 파악할 수 있다/모르는 척 멀찌감치 서서/끊임없이 전쟁을 찬양하고 부추기는/음흉한 자들을 증오한다/성전이라는 정의의 이름으로/무슨 짓을 벌이고 있는가/살인, 방화, 강간, 강도/도망치다 붙잡힌 여자들은 적군 앞에서/치마를 벗고 살려달라고 애원한다는 게 아닌가/여자에 굶주린 병사들이/가을 바람에 흔들리는 수수밭에 여자들을 밀어 넣고 온갖 악행을 저지른다/고국에서는 좋은 아버지, 좋은 형, 좋은 아들이/지옥 같은 전쟁터에서/인간성을 잃어버리고/짐승처럼 미쳐 날뛰다

「戦争とは何か」は、アジア太平洋戦争中の1942年10月に書いたもので、戦争の残虐な実

態を批判しており、戦争中の戦地での日本軍の行為を告発し、軍国主義に抵抗した反戦詩である。この詩は栗原が夫の唯一から聞いた話をもとに書いた。唯一は、1940年に徴用されて上海に行ったが、そこで日本軍の残虐行為を目撃したことを聞き、それを表したものである。しかも唯一は、その話をバスのなかで知人に話したことを盗み聞きした乗客から密告され、起訴された。「戦争とは何か」は、日本軍の残虐行為だけではなく、日本という国そのものの戦争加害性について改めて考えさせる。この詩の創作年月をみると、1942年10月と書かれている。1913年生まれの栗原は一生のうち、1931年の満洲事変をはじめ、1937年の日中戦争と1941年の太平洋戦争まで日本が起こした侵略戦争を三つも経験した。そのことを考えると、栗原は戦争中からすでに戦争に対して批判的であったことが推察できる。しかしながら、「戦争とは何か」は、戦争中は発表することができず、戦後、初の詩集『黒い卵』(1946年8月)に発表しようとした。ところが、前述したようにGHQのプレスコードに引っかかって全行削除²¹⁾させられ、のちに1986年に刊行した完全版に全文が収録された²²⁾。

さて、これから翻訳の際に起こりうる問題点と対策について考えてみたい。上記の詩の(ST7) と(TT7) の下線部(原文と韓国語訳の番号付けや下線は筆者による。)のところを見てみよう。

(ST7) スカートを除いて手を合わせるというではないか。

(TT7) 치마를 벗고 살려달라고 애원한다는 게 아닌가

(ST7) の「手を合わせる」の辞書的な意味は、1. 両方の手のひらを合わせる。拝む。また心を込めて頼む。2. 相手となって勝負をする。手合わせをする、となっている²³⁾。日本人は日常生活の色々な場面で手を合わせる動作をする。例えば、感謝を伝えるときや謝罪をするとき、また食事の前後に挨拶するときや、神社やお寺、お墓などの前でお辞儀をするときなどが挙げられる。韓国人の場合は、神仏に祈る時や懇願する時、また謝る時などに手を合わせる動作をするので、日本人とそんなに変わらない。

さて、「手を合わせる」という表現を韓国語に直訳すると「합장하다」「두 손을 모으다」にな

21) 全行削除されたのは、「戦争に寄せる」「戦争とは何か」「握手」の3篇と、短歌「巴里陥落、ヒットラー」である。(『黒い卵』、pp.126-127)

22) 「戦争によせる」と「戦争とは何か」が削除された理由について栗原は、解説のところで堀場清子と奥泉榮三郎との質問応答を引用し、GHQ占領下での米兵も日本軍と「同じ類だろうということを連想させる」から、と語った奥泉の話を紹介している。

23) 松村 明編(1990)『大辞林』三省堂、p.1628

る。さらに、(ST7) の下線部を直訳すると、「두 손을 모으라는 게 아닌가(両手を合わせるというではないか)」、もしくは「합장을 하라는 게 아닌가(合掌するというではないか)」になる。しかしながら、そのまま翻訳するとTT読者には意味が伝わらない可能性があり、不自然な文章になってしまう。しかもST そのものにしてもそれはどういう状況を表しているのか、文字通りの意味だけではうまく読み取れない。

先述したように、「戦争とは何か」は、戦争そのものを批判するだけではなく、「殺人。放火。強姦。強盗。」など、戦争を取り巻く様々な不条理を告発している。そればかりか、特に戦地や占領地において兵士による性暴力がどれほど広範囲に行われていたかを窺わせるものでもある。これらの状況から考えると、兵士達は女達に「殺さないで下さい」とか、「命を奪わないでください」とか、「助けてください」などと懇願する言葉を彼女達に言わせようとしたのではないかと推測することもできる。それと同時に女達はレイプの危険にさらされていることがわかる。さらに、次行に続いている文脈からみると、兵士達は女達を裸にさせて、人の目につかない高粱畑へ連れて行ってレイプする様子が連想できる。だとすると、「手を合わせる」とは、「助けてくれと懇願した」という意味としてとらえることが妥当だろう。だとすると、「手を合わせる」の韓国語訳は、「살려달라고 애원한다(助けてくれと懇願する)」になり、そうすると(ST1)の下線部は、「살려달라고 애원한다는 게 아닌가(助けてくれと懇願するということではないか)」と訳したほうがよいと考える。要するに、言葉そのものの辞書的意味にとらわれずに、全体の文脈からその意味を推測し、さらに文章の一部よりも全体の意味を理解したうえで翻訳しなければならない。さもなければ、本来の意味を伝えることができないからである。

次は、(ST7) と(TT7) の下線部に注目したい。

(ST7) 百鬼夜行の様を演じるのだ。

(TT7) 온갖 악행을 저지른다

(ST7) の下線部の「百鬼夜行」とは、日本のなどに登場するが、妖怪などの異類が夜に列をなしてあるくこと。百鬼が人に気づかれぬところで夜行する様子から、さまざまな人間が怪しげな振舞をするさまにいわれるようになった²⁴⁾。しかし、昔から人々の間に語り伝えられたST文化の説話の中の言葉なので、TTにはそれに当てはまる四字熟語がない。それゆえ、STと類似した意味を持つ適切な訳語を見つけないといけない。逐語訳にすると

24) 岩波書店辞典編集部(2002)『岩波四字熟語辞典』岩波書店、pp.544-545

「백귀야행(百鬼夜行)」になるが、やはりTT読者にとっては馴染みのない言葉である。ところが、上述したように「戦争とは何か」は、戦争そのものを批判するだけではなく、戦争を引き起した悪意に満ちあふれた者たちや、戦争を引き起こそうと画策する者たちを激しく糾弾している。さらに、戦争により引き起こされた「殺人。放火。強姦。強盗。」などを告発している。このように前後の文脈から考えると、「百鬼夜行」という言葉とほぼ同じ意味をもつパラフレーズの「온갖 악행을 저지른다(様々な悪行を行う)」と訳することができる。そうするとTT読者が読んで容易に理解できると考える。

4.3 「木の葉の小判」

(ST8)

私の心はさみしく閉ざされて/誰の言葉も得ようとはしない。/もはや誰一人新鮮なほんとの/生活については語らない、/人々は戦争に熱狂し/世界は巨大な精神病院になってしまった。/わたしは生気のまま>それの中に入れられて/当惑している。/そして私が時々吐息を洩らすと/「私めだ」と悲しい眼差しを送るのは/息子を戦線で亡くした貧しい母だった。/ひどい狂人は息子や夫の戦死さえ/からからと笑い/ 狐がくれた木の葉の小判のように/他愛ない鉄十字章をほこり、/そして神の如く恐れうやまう。/それがこゝでは最も美しい/道徳なのだった。「木の葉の小判」(63頁)

(TT8)

굳게 닫혀버린 내 마음은/누구의 말도 귀담아 들으려 하지 않는다/이젠 누구도 있는 그대로의 삶에 대해 얘기하지 않는다/사람들은 전쟁에 열광하고/세상은 거대한 정신병원이 돼버렸다/이런 곳에서 온전한 정신으로 살아갈 수 있을까/가끔 한숨을 내쉬면/전선에서 아들을 잃은 불쌍한 어머니가/그 마음을 안다는 듯 슬픈 눈길을 보낸다/완전히 미쳐버린 사람은 아들과 남편이 전사했다는 소식을 듣고도/갈갈 웃으며/ 여우가 준 나뭇잎 금화처럼/쓸모없는 철십자 훈장을 자랑으로 여기며/신처럼 모신다/여기서는 그런 게 가장 아름다운/도덕이었다. 「나뭇잎 금화」

先述したように、『黒い卵』は占領軍による事後検閲を受けながらも、反戦詩を集めた栗原の初の詩集である。詩歌集の中には、何の政治的な立場を持たない普通の人々が、戦争に翻弄された様子を窺うことができる詩も入っている。「木の葉の小判」もその中の一つである。では、翻訳の際に起こりえる問題点について見てみよう。

(ST8) 狐がくれた木の葉の小判

(TT8) 여우가 준 나뭇잎 금화

(ST8)を逐語訳すると、(TT8)の「여우가 준 나뭇잎 금화(狐がくれた木の葉の小判)」になる。ところが、(ST8)を字義通りに捉えたと、TL(Target Language)にはそれに当てはまる適切な表現が見当たらない。もちろん、文脈と状況に関連付けて考えるとTLの「쓸모없는 것(無用なもの)」「도움되지 않는 것(役に立たないもの)」という言い換え表現を使うことで、より具体的に伝えることができる。しかし、次に続く「他愛ない」という表現と意味がほぼ重なってしまう。また何よりも、このような類似的な表現を使うと、字義通りの解釈に過ぎないため、言葉の裏に隠された本意を読み取ることができない。しかも、「狐がくれた木の葉の小判」という表現を詩語に用いた作者の意図もわからなくなるため、避けたほうがよいだろう。さらに言えば、(ST8) の言葉は、字義通りの意味で使われているとは考えられない。だとすると、字義的解釈ではなく、比喩か慣用句的解釈かを採らねばならない。ところが、「狐がくれた木の葉の小判」²⁵⁾は、日本児童文学などでも良く知られた昔話として通っているため、STをそのまま直訳することにした。しかしながら、このような直訳はTTの読者の中で、すでに翻訳されたSLの書籍などの出版物を通して字義通りだけではなく、状況と文脈に応じて言葉の意味を把握している人ならともかく、一般のTTの読者にとっては理解しがたい。もちろん、前後の詩の文脈からすると理解できる可能性がないとは言いきれない。しかし、TT読者に作者が言おうとすることを正確に理解してもらうためには、文化的な事象や言葉にまつわる出来事、また物事などについて注釈を付けて補足的な説明を加える必要がある。

5. おわりに

本稿では、『黒い卵』の日韓翻訳における実践を通して、いくつかの事例を取り上げて Foreignization ストラテジーと Domestication ストラテジーという観点から考察した。具体的には、目次のところに同じ意味を持つ三つの言葉と作品の日付や元号、また2篇の詩を韓国

25) 『木の葉の小判』は児童文学で、江口渙(赤い鳥社、1922年)と菊池寛(愛育社、1949年)によって出版されている。あらすじをまとめると、ある爺さんが狐の毛皮を着込んで歩いていたら、二人の男に狐の化けだと思われ込まれて大変な目に合う。お爺さんは木の葉に自分が息をふきかけると小判にできるといい、二人を騙してその場を逃れる。二人は居酒屋で酒を飲んで勘定に木の葉を出すと思い逃げだと言われて捕まってしまう、というほとんど同じような内容の話である。

語に訳す際に浮上する問題をどう解決していけばいいのかについて検証した。

その結果、各カテゴリー別にForeignizationストラテジーを採用すべきか、あるいはDomesticationストラテジーを採用すべきか、その判断が容易ではなかった。一般的に、慣用句や比喩表現の場合は、Domesticationストラテジーを採用する傾向がよく見られるが、今回は必ずしもそうとは限らない。翻訳文は翻訳者によって異なる解釈がなされる可能性もあり、特に文芸作品は他のジャンルに比べて翻訳者がTTに介入することが多いため、どのようなストラテジーを用いるかを定めることは重要である。ところが、STとそれを取り巻くコンテキストをよく把握したうえで翻訳作業に臨めば、もっと広い範囲においてそれぞれに当てはまるストラテジーの採用ができると考える。

今回は、詩を形作っている言葉の意味だけ検証してみたが、言葉の持つリズムやイメージ、ニュアンスなどについて検証することはできなかった。これを今後の課題としておきたい。

【参考文献】

- 岩波書店辞典編集部(2002)『岩波四字熟語辞典』岩波書店、pp.544-545
 松村 明編(1990)『大辞林』三省堂、p.1163、p.1628、p.1937、p.2262
 栗原貞子(1983)『黒い 羽』人文書院、pp.18-155
 Jeremy Munday(2009)(鳥飼玖美子監訳)『翻訳学入門』(鳥飼玖美子監訳)みすず書房、pp.43-44
 Lawrence Venuti(2008)The Translator's Invisibility、Routledge、pp.138-143
 佐藤美希(2004)「日本語翻訳における foreignization と domestication のストラテジー —オスカー・ワイルドの作品翻訳をめぐる—」『国際広報メディアジャーナル 2』、pp.191-197
 玉置祐子(2005)「FOREIGNIZATION(異化)—理論と実際—訳文の語彙を中心に—」『通訳研究』日本通訳学会、pp.239-254
 水島裕雅(2016)「戦争と文学—文学的抵抗の問題を中心に—」『日本近現代文学と戦争』JNC
 梁偉鴻「翻訳におけるポライトネスと異質化翻訳ストラテジー —日英・日中の翻訳をめぐる—」創価大学大学院紀要(33)2011年、p.253
 李英和(2018)「栗原貞子の原爆文学の現代的意義」『日本近代学研究第59』韓国日本近代学会

논문투고일 : 2020년 01월 04일
 심사개시일 : 2020년 01월 16일
 1차 수정일 : 2020년 02월 05일
 2차 수정일 : 2020년 02월 13일
 게재확정일 : 2020년 02월 17일

 <要旨>

日韓翻訳にみる異文化理解のストラテジー

－栗原貞子の『黒い卵』の韓国語訳をめぐって－

李英和

本稿では、栗原貞子の反戦・原爆詩歌集『黒い卵』を取り上げて、日韓翻訳における事例を挙げながらForeignizationストラテジーとDomesticationストラテジーという観点から考察した。具体的には、目次のところに同じ意味を持つ三つの言葉をどう使い分けたらいいのか、また作品の日付や年度を表すときに用いられた和暦の元号を韓国語にどう訳すればよいかについて焦点を当てた。さらに、反戦詩「戦争とは何か」と「木の葉の小判」の2篇を選んで、そこに韓国語に訳す際に浮上する問題をどう解決していけばいいのかについて論じた。

その結果、各カテゴリー別にforeignizationストラテジーを採用すべきか、あるいはdomesticationストラテジーを採用すべきか、その判断が容易ではない。一般的に、慣用句や比喩表現の場合は、domesticationストラテジーを採用する傾向がよく見られるが、今回は必ずしもそうとは限らない。STとそれを取り巻くコンテキストをよく把握したうえで翻訳作業に臨めば、もっと広い範囲においてそれぞれに当てはまるストラテジーの採用ができると考える。

 Strategies for Understanding Interculturalism through
 Korean-Japanese Translation

Lee, Young-Hwa

In this paper, the translation of the Korean version of Black Egg, the anti-war atomic bombing anthology of Sadako Kurihara, was studied in terms of foreignization and domestication strategies, specifically, on how to translate three words with the same meaning in the table of contents, and handle Japanese era names written in various ways. I also discussed how to solve the problems of translating the two anti-war poems, 'what is war' and 'leaf gold coin from the fox' into Korean.

As a result, it turned out that the exact distinction between foreignization strategies and domestication strategies for each category was not easy. In general, idioms and metaphors tend to use domestication strategies, but it was not always the case for this study. However, understanding more about the contexts of the source language, it is thought that a variety of strategies can be used more widely.